

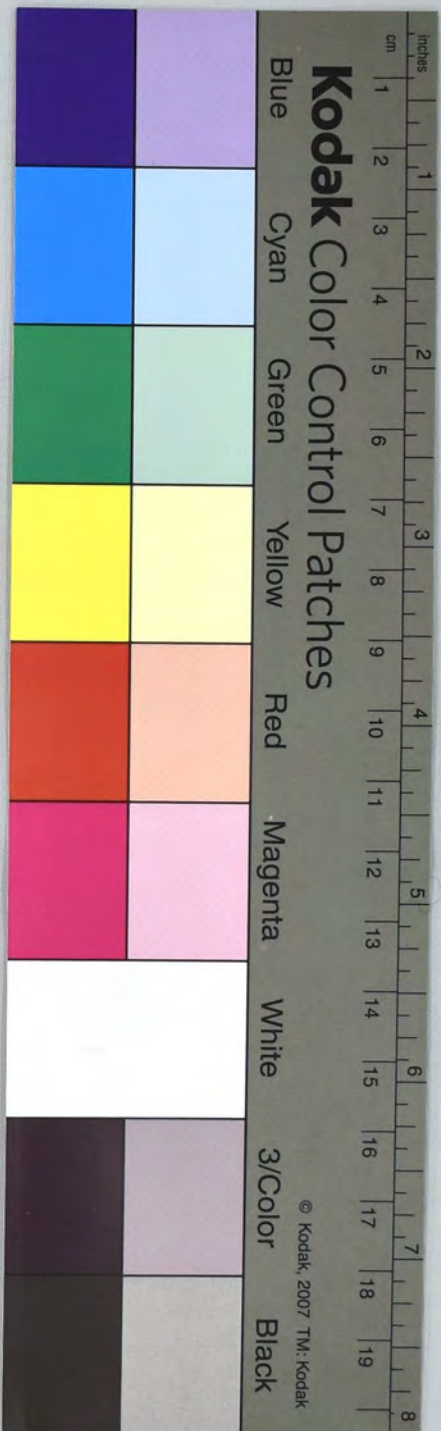
凶荒圖錄

完

欽定

農  
尚課

611  
才



小田切春江編輯  
木村金秋函圖

# 凶器圖錄

明治十八年  
五月刊行

愛知同好社藏版



凶器圖錄  
愛知同好社藏版  
明治十八年  
五月刊行



A611  
木

A611  
木

33.7.30 和  
39187

凶

有子 凶并區録  
 少海 有子  
 有子 有子  
 有子 有子  
 有子 有子  
 有子 有子

有子 有子  
 有子 有子  
 有子 有子  
 有子 有子

有子 有子  
 有子 有子  
 有子 有子  
 有子 有子

也  
 此  
 安  
 理  
 之  
 心  
 也  
 哉  
 計

從五位勝間田稔

凶荒圖錄序



凡急於生道者莫重於食先脩曰民以  
 食為天信哉言也然人僉以衣食住並  
 稱為不可一日闕者而其言未精也家  
 得一可以一世衣得一可以一歲至食  
 則每食輒消費不能僅保一日況乎如  
 家屋衣服金貨可換而凶歟之酷有抱  
 金而餓死者尚何救助之問乎雖雍熙

之化洽於四垠而水旱饑荒不能時無  
之則人各無豫備之計而可耶然人情  
安於所忽故飽而忘飢暖而忘寒迨然  
虛度猝遇凶歉然後始錯愕不知所為  
散之四方轉於溝壑遂將為狐狸蠅蚋  
之食而猶有不自悟者庸詎惑之甚也  
中古以來著書示方者不為不多而猶  
多困於凶歲者何也豈以天災人力不

相歎歎抑有其方未盡而人不及為之  
者也嗚呼今閱舊記凶荒之至如多經五  
十年者今茲距天保七年之舊既連其  
數而時氣不和陰雨頻至是或天之將  
蹶也何得然池公字屬者同好社員有  
感於此著凶荒圖錄欲公之於世乞余  
序之披其卷則畫饑孱慘怛之狀附以  
豫備之方簡而盡焉人之觀之者或感

山荒圖録

同好社藏

起或戒告而村而郡而州則斯卷雖曰  
 叢爾而其裨益於世豈鮮少乎哉予亦  
 對之悚然而恐肅然而戒其言發予恐  
 戒之間者不能自己也乃為序之  
 明治六年五月中浣

從六位野村賀真撰



山荒圖録

同次

○二宮金次郎先生茄子喰して山荒を知る圖

○付貝原樂軒翁の喻言

○名古屋藩施行の圖

○道路小於て飢人砂を喰ふ圖

○九州地方山荒橋南谿翁詠の圖

○西國飢饉金を持て餓死せし圖

○奥州山嵐飢民出羽小流落する圖

○同兎飢て母の乳房を喰切并親の股に喰付圖

山荒圖録

同好社藏

○ 同飢民牛馬と喰ふ圖

○ 同犬餓莩と喰馴て往来の人に鬻付圖

○ 同一村盡く餓死して亡所ともな図

○ 同富農僧小男兒と預けて死を免しむる圖

○ 鈴木金右衛門衣服を賣盡して窮民を救ふ圖

○ 芦澤源兵衛夜小入て施しとお次圖

○ 百姓丸内粟を作して凶年の備をおき圖

○ 義農作兵衛種麥を枕として餓死を免く圖

○ 古橋輝兒農民を集めて凶荒の話をかす圖

○ 凶歳は塩氣を含める筵を焚りて食する圖

○ 蟻蜂食を蓄へて冬春を凌ぐの圖

○ 救荒草木一覽

○ 有毒草木一覽

凶荒圖録目次畢



天保四癸巳年初夏霖雨止まば干時

二宮令次郎先生並列芳賀郡接町ふありて

或日茄子と食はる小其味恰も秋季の茄子の

ごとし箸を投て致して曰く是は陽発の気落くし

陰雨既に盡んかり竹を以てう糸穀熟まほを得ん豫じぬ非考に

備一がれは百姓飢渴に及ばんとんと即ち三邑の民か令して毎戸一五歩の

稗を蒔うしも果して盛夏と雖ども降雨多く冷気行れて終に凶象とあり

関東奥羽の民甚だ多し此時小至り三邑の民稗を以て食の不足を補ひ一民も

飢渴の患ひかたしものふし云々と富田高慶報徳記小出より



凡凶年のさざりわづら農務めて雑穀中米者も成べく食物小なるものと  
 心付し又常食を減じて之と無き物として貯へて困窮の時之をせしめて  
 要令をつかぐべし尤に農業全書の中具系樂軒の喻云を挙て農家考へ  
 の一助とす

凡飢饉年の兆とバ智ある人の夏の中に最早及ぶ處し尤七月下旬八月上旬六慥  
 に見ゆるものありきととも民ハ愚あるものにて其年亦く五穀の色をえて飢饉を悟り  
 早く身持と引かへて勒る事を志す先秋の賣り出束ねを悦びてさして飢死を  
 事をも糸へも心かまうせ候し食ひ方の物を用ひてさぐり求るも是等の蓄へたる  
 て年凶也ハ頓てゆる者多し然とバ秋に至り凶年の兆と見えバ農の惣司たる人  
 心を用ひて詳察し民とよくさとし争うて春の飢死を救ふ心遣肝要あり

又或所に領主より飢人一人に付て米を合わし一合除も扱米と与られしが  
 夫とて賊死の者あり是とて思へバ飢饉のさざりて民の趣目たるん  
 人其下の役人小懸心し合あり等の飢饉係死に及ばん事を小兒小物を教り如く細く  
 民心つひすびへ一扱秋一日の食物を飢饉飢饉の時ハ五六日かも合へば一小民つ  
 はくと先のさうん年の飢饉を思ひ合せさるバ秋の食物一日の分を三日に用ふるも  
 少くも其苦あさるれば秋一日に合食を春の飢饉を遁るため小二日半程に食ひ  
 合候へし是ハ葉大根等の枯菜を貯て此おとくほへし遠くは新かより農人一人の糧  
 に白米一升餘も合ふ所ありてこれを七合迄のつかりにまき三ヶ月かハを或本條  
 の糧米残より十一月までかくの如くせば三年條の米を得べしこれを衣ぬふ  
 一日小一合條の米かまれば二百日をうりの飯米生まるものありしりし初秋の

積り遠ひさまごの飢饉あつてはひ分が儉約とあり家内を人も七人もある家まで  
 たくはへさるる大分の穀物を以て年あつらん元々人の覚悟ハ農か近き役人多く  
 納得し突しと民を熟るに諭さしめ農人を得心してを早田の時よりか  
 く情しき食物小葉や芥薺ごとく物を加へて其の飢を恐る年深くと  
 いハ旺年ありとも夏のまハ稼死する者あふらんハ只是末の役人は年を  
 能會得し偏に妻子を諭さごとく眞実にくらゝを用ひてつひにゆるびるに  
 ありのこゝ

前に記す如く飢饉のさざりハ初秋ハかれら知るものあり農の惣司  
 より其下ある役人の妻しく云はせぬし農民の食物を儉約せしむる  
 きて甚著と多く種まきべし富の地ごとくは後々念をいせし延引す

とも藁も枯も地もされらるる山年ハ虫多き年あり夫由を殊ホ地  
 おしとらるるに在りも一圃のなき所あつて早田中田の所を妻しく拵へ  
 用也一かあつて力をまきし人にお慰め多くを  
 後の子入也死しに心を用ふべし次ハ大根とも多く時べし地ご  
 らへ右ハみごとく菜と大根ハ小きよりまきして汁かもし長きはふさぎ  
 食物不かくて穀物の助と飲べしよく農人か諭し秋のそごちより覚悟し  
 菜大根と多く拵おはたとし領地の恵み薄しとふとも突民しうとも稼  
 死の愁ひあふるべし

天保七年八月廿一日  
凶歲にして翌五年の春  
下民の困窮不むろくを  
行止の市街村落も  
餓死の斃者のあふまらば  
あうりけりはけい  
あうりて官よりハ  
名古屋度小治に  
施す小倉と  
没け粥と焚き



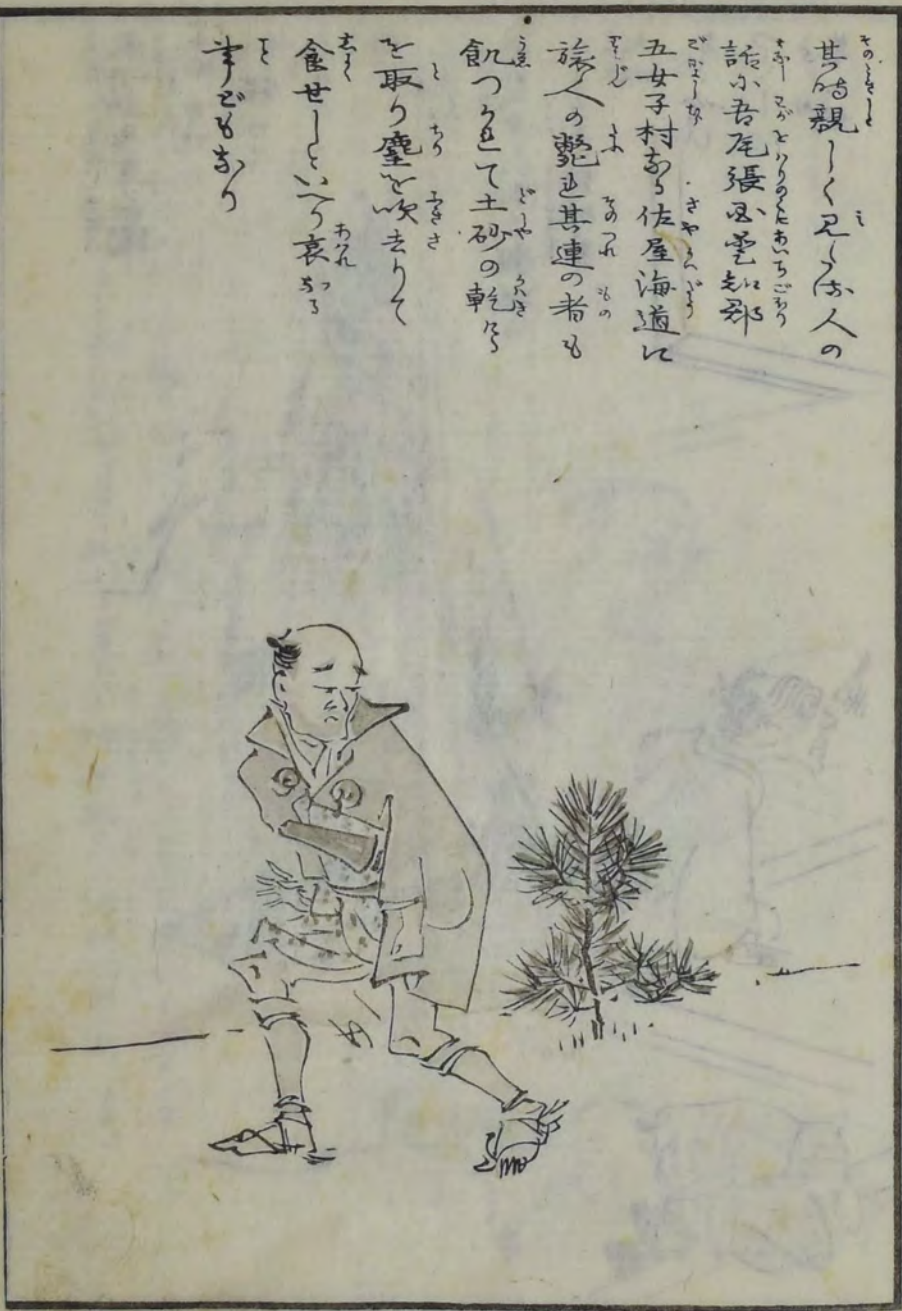
米を施さば  
又市中の  
慈悲家ハ  
夫々申合ひ  
金を集めて  
櫻の町天神  
社の境内に  
於て銭を施し  
窮民を救ひし



天保七年の凶荒、殊に  
甚しく餓死者に横たり



其の親しく見よ人の  
詭小吾尾張屋並知那  
五女子村ある佐屋海道に  
旅人の艶也其連の者も  
飢つらして土砂の乾き  
を取り塵を吹き去り  
食せしといふ哀さ  
すむもあり





天明四年四国  
九列の地  
飢饉にて  
人民の  
飢渇  
又斗か  
其翌年いかり穀物ハ  
もとより琉球羊  
大根  
あじ喰ひ  
つく  
葛の根



令錘スミラ  
かどの根と  
堀り入食  
せり  
予一日  
寄せて大為  
百姓の家に住むより一不老婆一人ありて人々のあき  
やと尋ねに家内皆々今朝うスミラ堀に菜とりと之と  
うく尋ねるに八里あまりの程はかき分けられん  
近きありハ堀冬一一本もかき入れ切七ツより起出て夜の間にあらはれん  
ゆき中をたぎり如くしと掘り堀りスミラ家内二日の合に足らばとけ家まかくあはれハまゝとて  
美氏の老人小児の多き家と思しやとて狗ふささせりと橋南翁翁の續西遊記に云々あり

享保十七年壬子ハ  
西国まで大飢饉あり  
比時石谷小治と  
像死せし者影一



ありけり其仲一人の男  
けり衣類身のまじり  
並かき出さるる其所の  
者死散と改むれば百兩と  
首に掛りありあり  
令と持する人飢死を免  
況んや貧乏人の像死せし  
從速くふんと思ひやせし  
ありし鈴木武助の農喻ふし



天明三癸卯年  
奥州地方大飢饉の

時甚しき村々の  
者ども食ふべき樹皮を  
穀物のあぶらとて食ふ  
志しき親子夫妻  
別れ地を執り又ハ妻子を  
引合ひ目的もふく乞食に出で  
途中にて食ふべき樹皮の芳に  
絶えし山路おどに倒さ



死せし者數  
前代未だの事どもあり  
通信雜誌 天明年中  
凶歳日記



其二

殊小幼子ことこの飢うまハ

乳房ちぶさと合あすいきいも

母ははも食くにまどうりー

身みふれれババ乳ちぶさもも飽あてて出でじ

されされれババ乳ちぶさももせせままりりて

乳房ちぶさをを喰くひひ切きりり又またハハ父ちちの

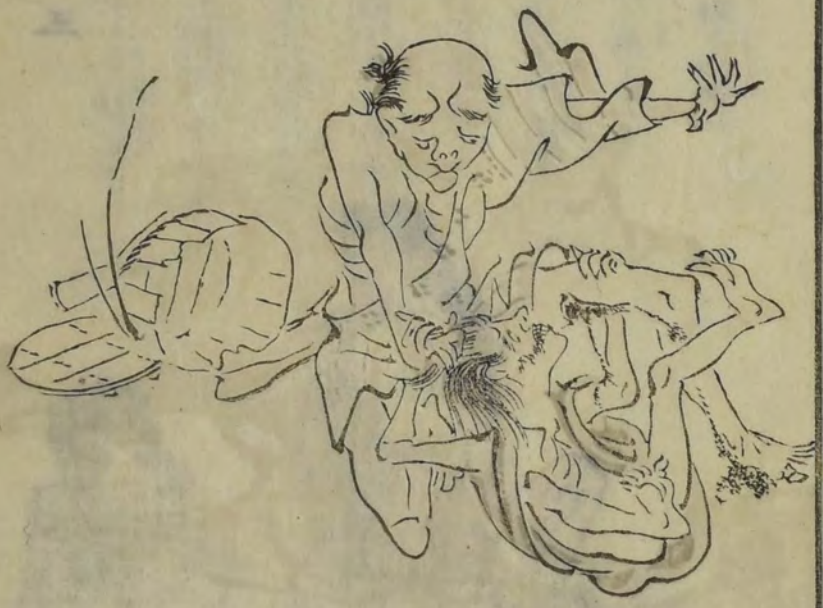
股うでおおどどにに合あ付つてて病やまひ犬いぬのの如ごとくくふふるる也なり

せんせんここかかくく櫃ひつちやうち長ちやうち持ちのの類るいふふ押お入いとと並ならぶぶもも

ちちりりととささるる

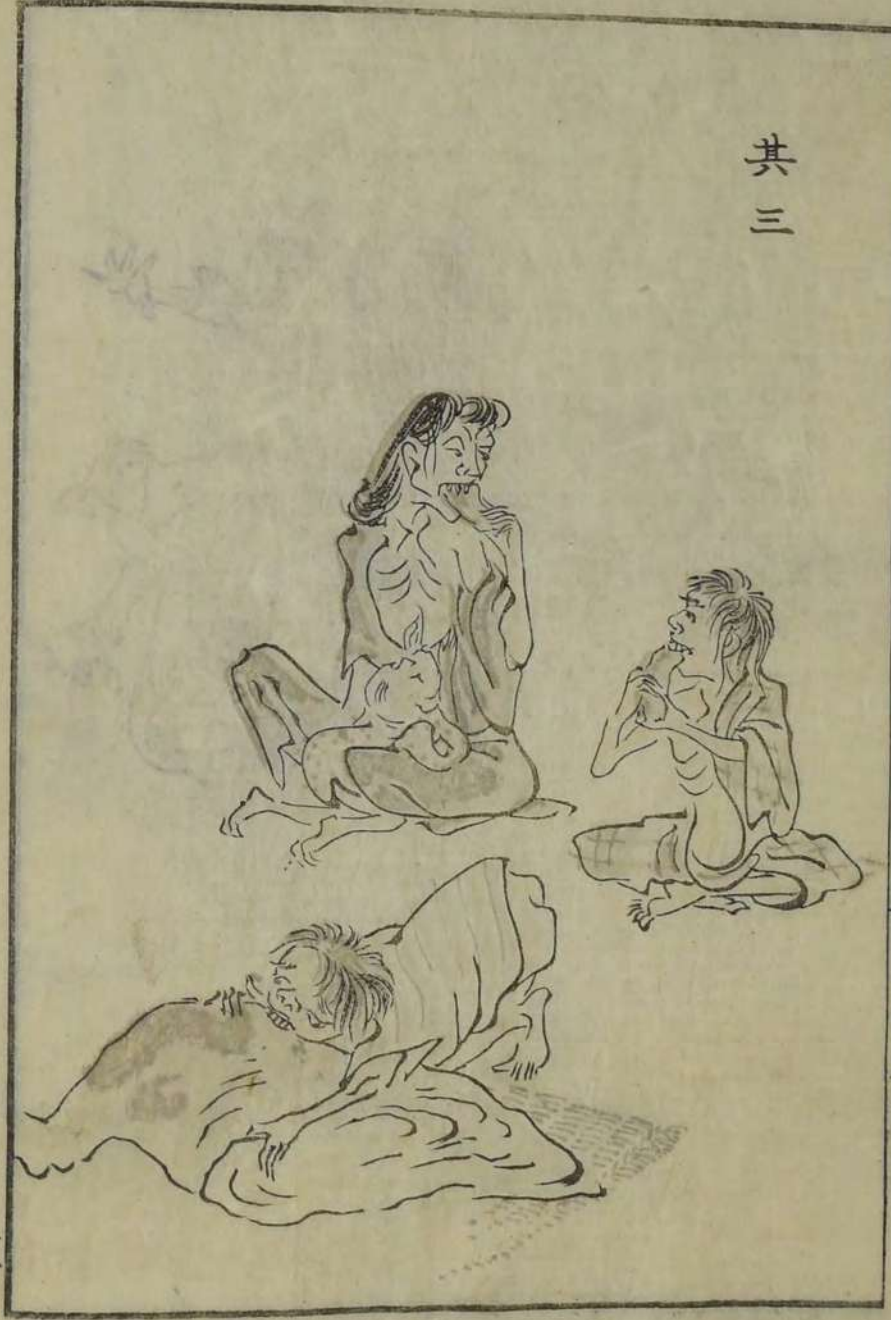


+





其三



大飢饉の村郷ハ

食物の類も乏ハ

一品もあらず牛馬の

肉ハつても更あり

犬猫までも喰そ

これぞつひかハ命と

保ち得びく隊死

せも殺るゑあり



其四

飢民所<sup>く</sup>の乃<sup>は</sup>終<sup>つ</sup>ふ  
 倒<sup>た</sup>死<sup>し</sup>する者<sup>もの</sup>救<sup>すけ</sup>と  
 初<sup>は</sup>穴<sup>あな</sup>と堀<sup>ほり</sup>り  
 埋<sup>う</sup>められ<sup>る</sup>後<sup>のち</sup>ハ  
 瘦<sup>す</sup>ま<sup>り</sup>構<sup>かま</sup>ふ者<sup>もの</sup>也<sup>なり</sup>  
 只<sup>ただ</sup>魯<sup>ろ</sup>秋<sup>しゅう</sup>の餌<sup>え</sup>か<sup>ら</sup>あ<sup>つ</sup>ぬ  
 左<sup>ひだり</sup>に犬<sup>いぬ</sup>と人<sup>ひと</sup>と喰<sup>く</sup>ひ<sup>ま</sup>す  
 夜<sup>よ</sup>中<sup>ちゆう</sup>往<sup>やう</sup>奉<sup>ほう</sup>の者<sup>もの</sup>唾<sup>つば</sup>付<sup>け</sup>に<sup>ま</sup>す  
 玉<sup>たま</sup>れ<sup>り</sup>



其五

其志一き折かて八家殺の  
 二三十も方一村或ひハ  
 竈の四五十もわこ一郷  
 かて人ニ命死奪一入として  
 命を保ち一おさもわりたり  
 而して其亡後を吊ふ者も  
 かけ並バ命の残り一日も  
 志まげまゝ死骸も埋め

がれバ畜獸の餌食と  
 おまの庭も門も藪と  
 荒れまゝ一村まへて  
 亡所とあり一も  
 ありと農喻か  
 見えり



其六

又或里に

有徳の農家

ありて金銀多く

貯へたれども

糧の蓄へなく

心細き折より旅僧一人

止者と云ふより一歩の

高きをたゞりて終夜



十日

物談をせしうち糧をく

しと飢んとはいふ字を欺さ

語りしに傍で我は出家の

身お世に先行先つて人の情を

りても余は余ふまはたれが

御身の男子を付ひりんと

有たれが主たんで男子一人を

傍に預け令二百兩を添へ遣次に傍金子を受べ

て男子を伴ひりり其後家に歸りて者らも後とも合せて

死せしが傍に付ひりり男子八獨り命を全ふせしと鐵年要録あり





出内小玲木合右門あまの  
 かり若止添三人にして初ノ誘圖  
 の中同死あり一は後役を辞し自ら  
 耕心一と云と涙りり天明の肌儘小  
 南部討軽の者来て識死者者殺しりし  
 六人合をの之と見こに志のびびり  
 四回并諸乃貝小悉く賣代かして  
 こ世と極小其妻もすはるまののりて  
 自刃の橋并衣殺ホと賣押と扱ひ一が  
 狩着替の終入ても賣て扱んとしんを  
 合名つ之とせめて女の刃ハ男子と速以  
 外ハ出るも着替かくは計ハ一せめてこれ

のハ坊一愛一と一妻まればハ男若ある外ハ出らざる也

又ある日午の娘ハつらと刺除き  
 又ある日午の娘ハつらと刺除き

又ある日午の娘ハつらと刺除き

又ある日午の娘ハつらと刺除き

又ある日午の娘ハつらと刺除き

又ある日午の娘ハつらと刺除き

又ある日午の娘ハつらと刺除き



常列行方郡潮来村小若川河を流しつゝものありて暮家小くかゝると  
 高業を夢し風に起る夜か寐己の業を嘗も最とも甚く深きものありしが  
 天明六年の凶嶽の上洪水山崩れおどにて飢死するもの夥し源吾衛  
 先きの此の倉ふ野へ登りては米麦を其村人の貸與へかゝりて返さぬ  
 かゝりてと云ひゆせしむて病に卧れ人の為か米を飽さぬ夜か入て奉ん書  
 かく重なり毎夜二百人三百人程にあり後か遠く者のまては少供へ  
 いろとかく引續き奉りたりと云はぬ賑はしむ民を救ひしつゝと  
 鳴峰源去流の注意をせりと云べし天保の凶嶽小音之河尾張の内か夜に  
 入て飽しをかせし是善者あり蓋し其意回し人か他人の飽しを受るハ  
 快と為ざるを慮りてあるに凶年飢寒ハハら来るものとも測るに

ざとバ人たる者常に其子ぶを置くべき事あり然るに其愚りもかく  
 徒ら小人の飽しを夢するハ恥づと云事あらびや故か平生儉約し三碗の飯二碗に  
 減じても一年二年の食料ハ蓄へ置  
 凶年非常の用に備へし  
 更かこそ

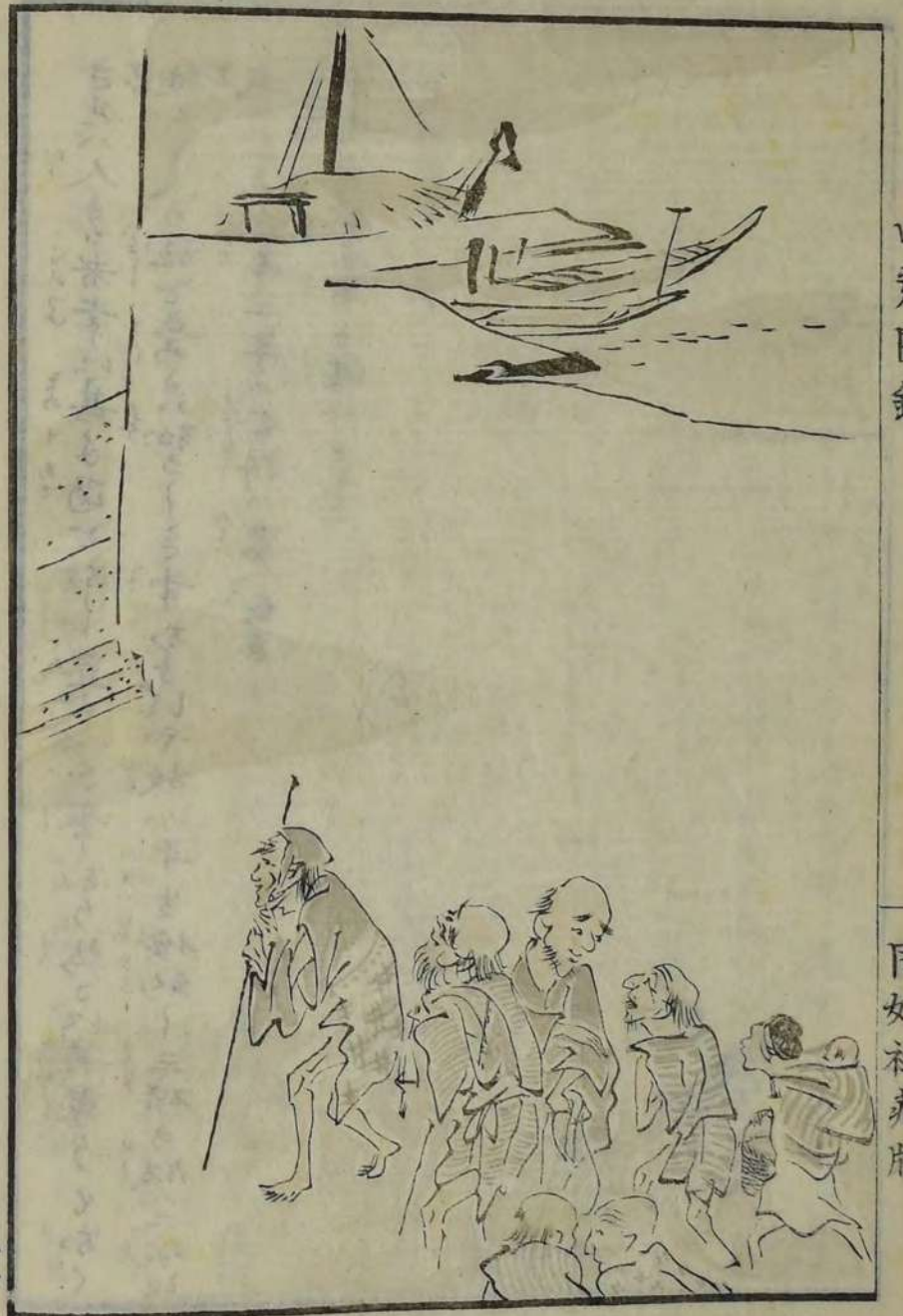


凶年圖録

同如社藏版



子



常陸國舟石川村に依内と

いへ百姓あり萬葉うして

能く其業を励み又穀物を

大切にかゝ常に鎌倉をもちと

あせしが隠居せし後かゝらく

農家へも賤少きものもさば饑寒の

てあて

子あかてハハハ物ありとて

別に畑敷をけけけ人子あかて



公納の餘りハ都て凶年の

備ハして積垂しに漸く

一倉小盈ぬ然るに天の

凶荒あつて村中饑渴ハ

及び其を被一倉の粟を

出一人の手にて死して死

施し飢者を賑濟する

濟急記聞ハ及りいと

感嘆ハ志あり





伊豫国伊豫郡筒井村  
 の義農作兵清なる  
 者ハ稟性朴直の  
 ものあり享保十七  
 年の凶歉にあり  
 民庶流離飢饉の  
 災厄に遇い田畝



荒蕪して種まき  
 食い蕪きにむきり化を流  
 溜らゝ農の家おまきたと死するとも  
 種穀を蕪きの理おくと種小種まを  
 枕としく眠死すをが為近傍の農家の  
 種によりて播種はる字と得恥蕪と免れ  
 あり後藩に其前義を逃賞し化を流の  
 子孫としく年頭の種と許し在屋敷  
 三人扶持と無へられりとも



明治十七年八月  
 吾三河波津郡  
 稻橋村の古橋輝克と  
 夫人諱々凶果の怖るる事と



衆人小志のめんとして各村の  
 農民を集め天保七年の凶穢に  
 遭ひたる老人として其時の  
 有様を親しく談話おさめ  
 ともに同皆習駭一慄懼の怖る  
 べし念せし記し兼て邪説祈り  
 誘導ありて野敷のしきり  
 後一層凶荒の凶を息せらるる  
 事と怪り蓋に意いかに  
 至せり



三河北設樂郡ある或老人の活  
 する天保七年の凶果に食物の足ら  
 ざるはもとよりかきいゝ又塩の不足せしは  
 尤困窮を極めたり初めの初めはさう事あり  
 ても後ハ塩氣を會ある床の古蓆を以て  
 こまりに刻み焚きて食せしと云ふかく  
 塩の拂底ある凡て凶歲ハ陰陽多きもの  
 也製法の足らざるにせしりとは法ハ容易く人の心付ざる  
 事あるは交ふたて後ハ、すめと次付ハ、永く年を極めず  
 塩勝、まうしてよと云ふものもあれハ、蓄穀小次ては、の、急る、事あり



塩勝、まうしてよと云ふものもあれハ、蓄穀小次ては、の、急る、事あり





夫入の力の及ばぬハ天災凶荒あるハ人皆凶荒飢饉の  
備ハ常に怠るまじき事あり是れ其時を急ぐまじきハ  
用心を怠るまじき平生兎角に怠りまじきものみれども  
凶荒の年と死といふ事ハ決してあらずのふ  
ゆゑ誰人も豫め備はるべく叶はぬ事あり  
彼蟻と蜂とを見よ蠢爾なる小虫かきとも平生力と  
恨せ夏秋のうちに食料を集め置き寒気の節ハ  
蟄居して之と食し命を保つこととゆるあり  
然る小万物の長き人間より凶荒の備と怠るハ  
同前の欲の覆は油断きより起るあり食不擇味に  
對してはわが身をわが命をわが身をわが命を  
人間の智慧は儲るものれはよくく狗もよとて  
蚊蜂も笑はざる用心こそ肝要あり

救荒草木一覽

丸小舉る所の救荒草木一覽ハ愛知青百社員カ田壽昌翁の撰ぶ所係り尤山野小多く自生する物小一して山荒の年小ハ之を採りて食用とおほべ一此餘救荒の草木多しと雖も救荒本草等の書に詳おと略しぬ

- |          |         |       |        |        |
|----------|---------|-------|--------|--------|
| ノアザミ     | ヤマアザミ   | ワスレグサ | ラグルマ   | キ、ヤウ   |
| 小薊       | 大薊      | 萱草    | 旋覆花    | 桔梗     |
| アキノタムラサウ | ノダケ     | ホウキギ  | カハチサ   | フトコヨモギ |
| 嵐菊       | 前胡      | 地膚    | 水蒿     | 牡蒿     |
| ヒントラノヲ   | キリンサウ   | ミ、ナグサ | ヤマカシエウ | ヒメヨモギ  |
| 水蔓草      | 蕒菜      | 卷耳    | 粘魚鬚    | 野艾蒿    |
| カハラヨモギ   | トラノヲ    | ウ     | イタドリ   | ヌマトラノヲ |
| 茵陳蒿      | 珍珠菜     | 杜當歸   | 虎杖     | 星宿菜    |
| ガ、イモ     | ワリガ子ニジン | ホタルサウ | ヲビイ    | オホヒルカホ |
| 蘿藦       | 沙参      | 樟牙菜   | 地      | 藤長苗    |

右の種類のものハ若葉を採り燥熟して二日又ハ四五日水に浸し苦味淡味の去るを度とし飯小交へ又ハ意て食ふべし

- |        |         |          |        |      |
|--------|---------|----------|--------|------|
| ハマエンドウ | カハラケツマイ | ケシアザミ    | ヨニタビラコ | ギボウシ |
| 野豌豆    | 山扁豆     | 苦菜       | 黄蘗菜    | 紫萼   |
| ノニンジン  | ヒルムシロ   | カラスノエンドウ | 子ムノキ   | ムクゲ  |
| 竊衣     | 眼子菜     | 大巢菜      | 合歡     | 木槿   |
| ハコヤナギ  | 千ヤンチン   | マルバヤナギ   | レウブ    | ハリギリ |
| 白楊     | 椿       | 青楊       | 山茶科    | 刺楸   |
| ク      | 拘杞      | コリンゴ     | クサギ    | サイカチ |
| イモノキ   | エノキ     | 棠梨樹      | 海列常山   | 兔茨   |
| ユキノキ   | 朴樹      | タラノキ     | アワブキ   | マタ、ビ |
|        |         | 槐木       | 山胡椒    | 水天蓼  |

- |      |        |        |       |        |
|------|--------|--------|-------|--------|
| オホバコ | オホケダテ  | コンキク   | イヌヨモギ | シラデ    |
| 車前   | 葦草     | 馬蘭     | 菴蘭    | 牛尾菜    |
| タビラコ | ノニユンギク | ヤマシノギク | カウソリナ | イヌノフグリ |
| 雞腸草  | 六月菊    | 鉄桿蒿    | 毛連菜   | 蔞      |

ヤマシロギク 野粉園児  
 イヌカウジユ 風輪菜  
 ナベナ 山芥菜  
 フミナヘシ 敷醬  
 千ハコグサ 毛女兒菜  
 ゲンノシヨウコ 牝牛兒苗  
 ヤマゴボウ 商陸  
 ヒルガホ 旋花  
 ノニンジン 野胡蘿蔔  
 ブクレーウサウ 鷄腰兒  
 リンボウキク 山蘿蔔  
 クサフヂ 山藜豆  
 ギジマ 羊蹄  
 タウシヤジン 杏葉沙參  
 イケマ 牛皮消  
 ソバノ菜 蕎麥苗  
 スベリヒユ 馬齒莧  
 カンアフヒ 冬葵  
 タゲイトウ 雁來紅  
 ハタザホ 南芥菜  
 スイバ 酸模  
 ミツナギ 苧蒿  
 ノギク 鷄兒腸  
 シロ子 地丸地苗  
 ハコグサ 氣麩草  
 ツルムラサキ 落葵  
 イハタバコ 苦苣苔  
 右の種類ハ能く生長ししる葉を揉り燥熟するて水で洗ひしる味和へ又ハ阪か交へ  
 食レベ

ベニバナ 紅藍  
 ハニニンジン 蛇床子  
 マツナ 蘇蓬  
 ノゲイトウ 青葙  
 タゴボウ 水芥菜  
 スカシタゴボウ 風花菜  
 ハコベ 蒼縷  
 アカザ 藜  
 ヒユ 蕺菜  
 シバナ

ハマアカザ 野灰菜一種  
 タ子ツケバナ 碎米薺  
 フカヒジキ  
 ダンバイウチハ 還藍菜  
 ナヅナ 薺  
 ケイトウ 雞冠  
 ヒヤウナ 白苣  
 右の類ハ苗又ハ葉を擇り煮て食レベ

アマトコロ 萎蕤  
 ナルコユリ 黄精  
 トコロ 川草薺  
 ヤマヒラ 野韭  
 ウバユリ 蕎麥葉貝母  
 右の種類ハ根を擇り塩水に燥熟し味和へ又ハ煮て食レベ

サユリ 百合  
 ヤブラン 麦門冬  
 サンダイガサ 綿棗兒  
 ホドイモ 土團兒  
 クログワエ 烏芋  
 ミヤウジヤニンク 車前葉薺  
 カタクリ 山椒  
 ノビル 山蘇  
 右の種類ハ根を擇り塩水に燥熟し味和へ又ハ煮て食レベ

ワスレグサ花 萱草花  
 スイカフヲノ花 忍冬花  
 フギノ花 紫藤花  
 クチナシノ花 梔子花  
 キクノ花 甘菊花  
 ケシノ花 御茶花

右の種乾ハ花と梅り煤熱さて一日ぐと水に浸くよく洗ひあへ物かして合次

スズメノ子ヤキギサ タウムギ 薏苡  
スズメノカタビラ スズメノヒエ 地楊梅  
コウボウムギ 薺草  
エノコログサ 狗尾草  
スズメキビ 野黍  
カラスムギ 燕麥

右の種乾ハ実のよく熟しよく梅り于粗糖と搗去り炒りて粉とあへ又ハ其俵粉とあへ  
條小搗或いは飯粥とあへ食べべ

クヌギノ子 ハ、ノ子 ト子 七煉樹  
カ 櫛

右の種類ハ實の熟しよく梅りよく搗りて皮を去り壓汁して烹煎ハ流多又ハ桶  
に水か浸し時々水を更へ五六日を経て洗味の去を交し于乾し粉とあへ米麦の交へ  
餅とあへ食べべ

トツクリイチゴ キイチゴ ナハシロイチゴ フユイチゴ ヤブイチゴ  
覆盆子 懸鉤子 藕田蕉 寒莓 蓬萊

ヘビイチゴ カヂイチゴ アハイチゴ カウソ  
蛇莓 烏スゴ ヤマダハ  
クハ、樵

右の種類ハ蝕く蝕くよく梅り生かて食へてよ

ガマノメダシ ヨシノメダシ マコモノメダシ  
蒲 蘆 菰  
右の種乾ハ嫩芽一寸除去しものを梅り煤熱さて水に浸し煮て食べべ

有毒草木一覽

前小食用とあへて宜しき草木若干種の名稱と食用方等の大槩を記載せし雖  
ども誤て有毒の草木と梅り奉り食する時ハ其害實に恐るべし故小其名稱を記  
卷末小附き其最も甚しきハトクウツギ等にして之を食へば合する時ハ卒死する事

性あり又花實の美麗あるを遊んで玩弄して誤て食する者あり  
 精神恍惚吐瀉腹痛或は舌唇腐爛全身麻痺癡狂又卒死する者あり  
 其開状の辨せざるもの妄に食すべし其原質の精究するに於つてハ先輩の有毒  
 草木圖說等に詳おさるるに掲げば

猛毒品

- ドクウツギ 木本草精華鈎吻 カブトサウ 附子 テウセンアサガハ 曼陀羅花
- 大毒品

- イヌホウツキ 龍葵 イボノキ
- ホルトサウ 續隨子 ホタンヅル 女萎 ドクセリ 并葉鈎吻 タケニクサ 博落迴
- ツタウルシ 野葛 ムサシアブリ 虎掌 ウラシマサウ 虎掌 オニシバリ
- ハナヒリノキ 木藜蘆
- コセウノキ 白瑞香

右の種は本草中最大毒あるを決定して合次へらざるものあり誤て食はば死に處る

毒品

- ヤマドリカブト 草烏頭 マムシサウ 斑杖 フヂウツギ 醉魚草 コバイケイ 蒜藜蘆一種 コセウノキ 白瑞香
- コンニヤク 藜蘆 テンナンシヤウ 天南星 アセビ 馬酔木 サハナスビ 草本草精華鈎吻 サゼンサウ 地湧金蓮
- キケマン 黄蓮 キツ子ノボタン 田々蒜 キツハシ 羊躑躅 キリシマ 石藜 ミヅハセウ 海羊
- ミヤマシキミ 茵芋 シタマカリ 石蒜 シエロウサウ 藜蘆 シキミ 葎草 センニンサウ 大蓼
- イラウサ 蕁麻 イチハツ 鷲尾 イボクサ 水竹葉 ホウセンクワ 鳳仙花 ボクシホウフウ 防葵
- トウダイグサ 澤漆 ドクダメ 藪菜 カラスヒシヤク 半夏 タカトウダイ 大戟 タウノゴマ 蓖麻
- タウキボウシ 玉簪花 ツクバ子サウ 玉蒜 ナフトウダイ 蓬 ラウノキ 櫛 ムラサキケマン 紫莖



ウルシノキ  
漆

テウジザクラ  
荒花

ヒアフギ  
射子

ノウルシ  
草蘭茹

アブラギリ  
罌子桐

ヒヨドリヅヤウゴ  
蜀羊泉

ヤマゴボウノ根  
高陸

アサガホ  
牽牛花

スイセン  
水仙

ヤマツノジ  
山躑躅

キンポウケ  
毛茛

コクサギ  
常山

キコカニヒ  
莖花

右の種類ハ草中<sup>クサナカ</sup>有毒<sup>ドク</sup>多<sup>オホク</sup>ク然<sup>シカドモ</sup>も前<sup>マヘ</sup>に比<sup>ヒ</sup>き<sup>も</sup>ハ其<sup>その</sup>毒<sup>ドク</sup>輕<sup>かろ</sup>し

凶荒圖録畢

廿七了

明治十八年四月二十八日御届  
同 年五月十六日出版

編輯 兼  
出版人

愛知縣同好社幹事愛知縣士族

小田切春江  
名古屋區南久屋町百一番邸

愛知縣同好社幹事愛知縣士族

木村金秋  
名古屋區比米町十六番邸

愛知縣同好社幹事愛知縣平民

彫刺師 豐原堂  
豐原 稻文  
名古屋區下長者町百十三番邸

画圖

愛 知 県



1103283165